〈原著論文〉

道徳教材としての二宮金次郎論

伊　藤　利　明*，石　村　由利子**

The Theories of Kinjiro Ninomiya as Teaching Material for Moral Education

Toshiaki Itoh and Yuriko Ishimura

要旨：本論文の目的は、二宮金次郎の道徳の考え方を明らかにして、検討し批判を加えることである。従来、二宮金次郎の伝記は、勤勉という徳を教えるための道徳教材であった。二宮金次郎が道徳教材として取り上げられた理由は、大人になってからの思想や実績が優れていたためである。ここから子どもの時の勤勉だけが注目された。しかし、二宮金次郎の道徳の考え方はほとんど取り上げられていないし、検討されてもいない。

二宮金次郎は、道徳を「心の田」の開発で説明しようとしていた。この「植物モデル」は農民の生活に根ざしている半面、子どもを受け身的な存在とみなしている。金次郎はあらゆるものに徳があると考えている。しかし、徳は優れた性質を持っているので、荒地も徳を持つという説明は誤っている。

次に、二宮金次郎の道徳の考え方の特徴は、自分のためという利己主義ではなく、人のためという利他主義であった。二宮金次郎は勤労、分度、推譲を主張し、家族や親せきだけではなく、他者や村のために自分の蓄えを使用した。二宮金次郎が注目された理由は、この利他主義ではないだろうか。勤労という徳は、他者との生活扶助を達成するために存在しているが、学校では、勤労だけが単独で取り上げられており、二宮金次郎の思想の全体が見失われたままである。

二宮金次郎にとって、道徳を身に付けることは「仁義礼智」を習得することであった。しかし、これらの徳を習得した理想的人間像の詳細が説明されていないので、どのような人間に育てたいのかが不明である。さらに、二宮金次郎の考え方は当時の身分制度を存続させるものである。

二宮金次郎の伝記は、勤労を学ぶための道徳教材として有益であった。しかし、勤労は二宮金次郎の思想の中の一部であり、その全体を理解しているとは言えない。勤労は徳のひとつであるが、自分のため、他者のために行うことも教えるべきである。

Abstract: The purpose of this paper is to examine and criticize Kinjiro Ninomiya's moral theories. The life story of Kinjiro is widely used as teaching material for moral education to teach the virtue of industriousness, drawing on the exceeding value of both his thoughts and actions. However, it is only the industriousness of his childhood that draws people's attention, and his moral theories have been left largely undiscussed.

Kinjiro tried to explain his moral theories as developing the 'fields of the mind'. This 'vegetable model' is rooted in the life of a farmer, but treats children as entirely passive. Kinjiro believed that there was virtue in everything, however, given that virtue is always good, his explanation that even a wasteland is virtuous is mistaken.

A characteristic of Kinjiro's moral theory is the emphasis not on egoism but on altruism. Kinjiro lauded industriousness, thrift and compassion for others. He gave his savings to his family and relatives, but also to others or for the benefit of the village. This altruism may well be the reason why Kinjiro gained prominence. Industriousness to Kinjiro was to assist in providing a livelihood for others, yet in schools, only the industriousness part of Kinjiro's whole theory is taught, and the rest ignored.

受付日　2018. 5. 24 ／ 掲載決定日　2018. 9. 11
*関西福祉科学大学　健康福祉学部　教授
**元愛知県立大学　看護学部　元教授

For Kinjiro, to be ethical meant to master benevolence, justice, courtesy and wisdom. However, he failed to give a detailed explanation of what an ideal human with these virtues would actually look like and how such a person should be raised. Furthermore, Kinjiro's way of thinking maintains the class system in those days.

Kinjiro's life story is indeed useful as teaching material for moral education to learn the importance of industriousness. However, industriousness is only a part of Kinjiro's entire theory and does not provide an overall explanation of his ideas. On the other hand, it is true that industriousness is a virtue, but it should be taught alongside altruism in addition to egoism.

Key words：道徳教材 Teaching Material for Moral Education　二宮金次郎 Kinjiro Ninomiya　勤労 industriousness　利他主義 altruism　徳 virtue

はじめに

二宮金次郎の名前を聞くと、一定の年齢以上の人は校庭の片隅にあった二宮金次郎像を思い浮かべる。二宮金次郎像は校庭を整地するときに取り壊されたものが多いが、現在でも新しく設置している学校もある。この二宮金次郎像は勤勉を象徴しており、児童・生徒に勉学の大切さを教えている。勤勉は、もともと仕事や勉強に一生懸命に取り組む様子を意味しているが、同時に、一生懸命まじめに行動する様子の代名詞にもなっている。二宮金次郎の生涯は、勤勉という徳を教えることと深く結びついている。成長した後に、村や藩を立て直したが、その実績よりも子どもの時の勤勉に中心が置かれている。

二宮金次郎は、読み物教材として道徳の時間の副読本に掲載されていた。また、『わたしたちの道徳　小学校一・二年』では、「小さな　ど力の　つみかさね」という主題で掲載されている。この主題は積小為大を説明しており、小さなことをこつこつと積み上げると大きい成果が得られることを教えている。児童・生徒に勤勉を教える際、二宮金次郎の読み物教材は適切なものであると理解された。二宮金次郎の読み物教材は教師が取り扱いやすいものであり、児童・生徒が理解しやすいもののひとつであった。

しかし、時代が経ち、二宮金次郎の物語を読んでも、現代の児童・生徒が共感することが難しくなっている個所がある。二宮金次郎によって表される勤勉をどのように学び、現代社会において活かせるかを考えなければならない。

筆者らは、論文「道徳教材としての『先人の伝記』の適切性と有用性」[1)]において、道徳教材としての読み物資料を活用するための前提として、正確さ、時代考証の必要性を指摘した。その際、道徳教材としての読み物資料の問題点として、二宮金次郎を例にして人物描写の不正確さなどを指摘した。しかし、二宮金次郎が主張する道徳的考え方の本質的部分を十分に取り上げることができなかった。今日まで子どもの時の勤勉だけが注目され、二宮金次郎の道徳観そのものに関する議論はほとんどされていない。

そこで、本論文では、二宮金次郎の報徳思想を検討し、勤勉だけではとらえきれないこと、思想の全体像の説明が不十分なことを指摘する。第 1 に、なぜ二宮金次郎の伝記が道徳教材として取り上げられたかの理由を考える。第 2 に、道徳教材としての二宮金次郎の道徳観の捉え方について批判する。第 3 に、二宮金次郎が主張した徳を紹介し、道徳教材としての位置づけを検討する。第 4 に、二宮金次郎の伝記を道徳教材として活用するときの留意点を述べる。

Ⅰ　二宮金次郎の伝記を道徳教材として取り上げる理由

道徳教材として二宮金次郎の伝記を取り上げる理由を考えてみよう。

1　二宮金次郎の思想や実績の偉大さ

なぜ二宮金次郎が勤勉を教えるための道徳教材に選ばれたのかを考えてみよう。選ばれた理由として、次のことを指摘できる。

第 1 に、二宮金次郎の思想や実績が並外れたものであったことである。大人になってから、二宮金次郎は村や藩の財政を立て直し、実績を上げた。この実績から、子どもの時の努力が注目された。子どもの時から努力を積み重ねれば、二宮金次郎のように立派な成果が得られるというわけである。子どもの時の努力する姿を道徳教材に使用することが考えられても不思議ではない。二宮金次郎の子どもの時の姿を近代・現代の子どもに教えることは、年齢が近い利点もあり、勤労という徳を教えるのに効果があるとされたと理解できる。

第 2 に、二宮金次郎の思想の中に、自分のためだけで

はなく、村や国家のために努力することが含まれていたことを指摘できる。自分のためという利己主義ではなく、他者のためや社会のために役立つことを教えるのに都合がよかった。「勤労」は個人の利益のためだけではなく、社会の利益のためという二重のねらいを持っている。「勤労」は単独で存在するのではなく、二宮金次郎の思想全体の中の一部分として位置づけられている。では、二宮金次郎の思想の中の「勤労」の位置づけを見てみよう。

二宮金次郎の思想の根幹は、心の状態である「至誠」とそれを実行することである。この思想は、二宮金次郎の苦しい体験に基づいている。二宮金次郎が5歳のとき、酒匂川（さかわがわ）の大洪水で田畑が荒れ地になった。父の利右衛門が病気になり、治療費を払うのにも苦労をした。二宮金次郎は、14歳で父を、16歳で母を亡くしている。さらに、酒匂川の堤防決壊で田畑を流失する。二宮金次郎は、子どものころからの苦労した体験によって、働くことや勉強することの大切さを学んだ。

二宮金次郎は報徳思想を作り上げた。この報徳思想が二宮金次郎の思想の中心であり、多くの人々に受け入れられた思想である。報徳思想は、「勤労、分度、推譲」から構成される。以下にこの思想の概要を引用して示す。

「報徳は「勤労、分度、推譲」の三原則を基本とします。

【勤労】は生活の基本であり自助努力の大原則ですが、同時に知恵を働かせて労働を効率化し、社会に役立つ成果を生み出すという自覚を重視します。

【分度】は経済的には、収入の枠内で一定の余剰を残しながら支出を図る生活、経営の確立。計画経済の基本です。この余剰が、明日の、来年のそして未来の生活、生産の発展と永安のための基礎資源となります。

【推譲】は、分度生活の中から生み出した余剰、余力の一部を、各人が分に応じて拠出します。これが報徳資金になり、相互扶助、公共資本あるいは弱者、困窮者救済に宛てられ、家政再建、町村復興、国づくりが進められます。尊徳は桜町領復興に当たり、小田原の田畑家屋敷、家財を全て売り払い、それを仕法の資金として推譲しました。」[2)]

この報徳思想の中の「勤労」だけが注目され、単独の道徳教材として取り扱われてきた。小・中学校の学習指導要領にも、内容項目のひとつとして位置づけられている。「勤労」という言葉は労働することを連想するが、もっと広い意味で捉えるべきである。「勤労」は、心の状態である「至誠」に基づいて行動することを意味しており、日常生活を送る際の行動のすべてを意味している。道徳の授業で、「勤労」は一生懸命仕事をしたり勉強したりして努力するという意味で使用されることが多い。しかし、何のため誰のために勉強し働くかはほとんど注目されてこなかった。児童・生徒に自分のできることを考えさせたり、何を努力するかを聞いたりすることは大切であるが、世のため人のために何ができるかは、あまり問われていない。「勤労」だけを道徳教育の内容項目にすることは一面的な取り上げ方であり、二宮金次郎の思想の全体像を正確に捉えていない。

一方、「分度」と「推譲」については、道徳教材として十分に取り上げられてこなかった。理由としては、道徳を教える教師が二宮金次郎の思想をあまり理解していなかったと推測されることによる。二宮金次郎の思想の全体を理解させるより、「勤労」という徳を注入することに教師の力が注がれてきた。さらに、小学校1・2年生の発達段階から考えるとその思想の全体を理解することが難しいこと、特に「分度」と「推譲」を教えることが難しいことが指摘できる。

「分度」については、収入の範囲内で生活をすることや将来の生活に備えて支出を抑えることを意味しているが、学校ではほとんど取り扱われていない。具体的な内容として、こづかい帳の付け方などの金銭教育は、教科においても、十分な指導がされていないと思われる。また、将来の生活を見据えてお金の使い方を考えることも、あまりされていないと言える。

「推譲」については、自分や家族、親せきのために余裕のお金を蓄えておくことは誰にでも理解できる。他方、血のつながりのない他者や関わり合いのない村を救うために蓄えることは大切なことであるが、なかなか理解することや教えることが難しい。「相互扶助」の考え方は生活をしていく上で大切なものである。他者を救うことは道徳的な行動であり、二宮金次郎の思想や行動の中で最も優れていると評価できる。しかし、この「推譲」は道徳の授業ではほとんど取り上げられていない。報徳思想の中で、この「推譲」が最も特徴的であり、最終的に目指すべきものである。この「推譲」を実現するためには、「勤労」し「分度」を守って生活することが必要である。

2　実践家としての二宮金次郎

江戸時代後期の思想家は何人かいたが、実践家は少なかった。二宮金次郎は、自ら農民としてコメ作りを工夫して収穫量をあげた。二宮金次郎は、思想家であるとともに実践家であった。小田原藩家老の服部家の再建をはじめ、約600の村を立て直した。

二宮金次郎の実践家としての実績から、子どもの時か

らの勤勉の大切さを導き出したと言える。大人になってから実績を上げるためには、子どもの時に勉強や仕事に励むことが必要である。実践家として二宮金次郎の実績が優れていたので、その前提となる勤勉が注目された。子どもの時から勤労に励み、勉強を進めることが、児童・生徒に道徳教材として提示されるようになった。児童・生徒が勤勉を修得すれば、将来の生活に生かすことができることを説く道徳教材として取り上げやすかったのである。

3　明治政府の意向

明治政府が求めていた人物像は学制に表わされている。学制の基本方針を示した太政官布告「学事奨励に関する被仰出書」1872（明治 5）年によれば、学校に通って勉学に励むことが立身出世につながる。学問は身を立てるための財本とみなされ、立身・治産・昌（しょう）業を目指して学校に行くことを奨励していた。この方針はあらゆる階層の人々を対象にしており、四民平等の取り扱いをしていた。農民から身を起こした二宮金次郎の経歴はこの趣旨に合致していた。

このような明治政府の期待する人物象には、二宮金次郎が主張した「勤労」の考えと重なる部分がある。「勤労」は、自助努力して日常生活を送ることである。国民ひとりひとりが一生懸命学問や仕事に励むことは、産業を盛んにするという結果をもたらす。明治政府は二宮金次郎の伝記を活用することによって、すべての子どもを学校に通学させ、近代的な学校教育制度を確立しようとしていた。

そのため、1872（明治 5）年の学制の教育課程の中に、「修身口授（ギョウギノサトシ）」という教科を設置し、国民に対して道徳教育を行うことを示した。これは教師が児童に道徳的な話をする教科であった。1880 年（明治 13 年）公布の改正教育令では、小学校の教育課程において「修身」を最上位に置いた。1890（明治 23）年には、「教育に関する勅語」が発布された。その中では、「父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ」という儒教倫理や「学ヲ脩メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓発」することが主張されている。1904（明治 27）年発行の国定教科書「尋常小学修身書」では、二宮金次郎が取り上げられ、「孝行」、「勤勉」、「学問」、「自営」という 4 つの徳目が教えられていた[3]。国定教科書で取り上げられた二宮金次郎は、親孝行で仕事や勉強に励む人物として描かれていた。明治政府は、「勤勉で、親孝行な農村の模範的少年」[4]として二宮金次郎を道徳教材として活用したのである。

4　勤勉の象徴としての二宮金次郎像

二宮金次郎の像は誰でも勤勉の大切さを理解でき、設置が進められた。現在でも、いくつかの小学校で新たに設置されている。二宮金次郎像の設置は、座学で教えるよりも、直接目で見て勤勉を理解するというねらいを持っていたと推測できる。二宮金次郎の像を見れば、何も説明しなくても、寸暇を惜しんで勉強に励んでいることが読み取れる。子どもたちは小学校の校庭にある像を毎日見ながら、勉強の大切さを学んでいくことになる。二宮金次郎像は 1 メートルの高さである。尺貫法を廃止して、メートル法（1921 年）を取り入れ、推進するための高さであるとも言われている[5]が、小学生にとって目線が合う高さであり、身近な道徳的象徴として認識された。

Ⅱ　二宮金次郎の道徳観

1　二宮金次郎の道徳観の形成

道徳に対する考え方を道徳観と呼ぶことができる。二宮金次郎は道徳教育という言葉を使用していないが、後世の世代から見れば、この道徳観を実践することは道徳教育を実施することそのものであると言える。二宮金次郎の道徳観を理解するために、生い立ちや環境と照らして見てみよう。

二宮金次郎の道徳観は「心の田」を開発することである。この「心の田」は、二宮金次郎の生い立ちや育った環境と関係している。二宮金次郎は農民の家に生まれ、自分や家族、一族の生活を豊かにするために、仙了川の堤防に菜種を植えて、行燈のあぶらと交換したとされている。捨てられた苗を用水堀の空き地に植えて約 1 俵のコメを収穫したりした。荒地を開墾することは、田を増やしコメの収穫を増やすためであった。自分の実体験から道徳観を導き出したと理解できる。

二宮金次郎は、「私の本願は、人々の心の田の荒蕪（こうぶ、注：土地があれていること）を開拓」することであると述べている。この説明は「植物モデル」と呼ぶことができ、二宮金次郎自身の道徳観を表現していると理解できる。「植物モデル」では、イネという植物を育てるように、人間の心を育てていくことになる。二宮金次郎は、次のように説明している。

「私の本願は、人々の心の田の荒蕪（こうぶ）を開拓して、天から授かった善（よ）い種、すなわち仁義礼智というものを培養して、この善種を収穫して、又まき返しまき返して、国家に善種をまきひろめることにあるのだ。（中略）そもそもわが道は、人々の心の荒蕪をひらくのを本意とする。一人の心の荒蕪が開けたならば、土地の荒蕪は何万町あろうと心配すること

はないからだ。」[6)]

この説明は、二宮金次郎が「心の田」を開発し、コメを収穫することを大切に考えていたことを示している。二宮金次郎は農民の家に生まれ、子どもの時からコメ作りを仕事にしていた。自分の体験から、人間の心を育てることとコメ作りを関連付けたと理解できる。この説明を聞いているのは農民なので、「心の田」という表現は理解しやすい言葉であったと推測できる。

二宮金次郎は、「人々の心の田」を開拓することによって、ひとりひとりの個人の「心の田」を開拓し、最終的には「国家に善種を蒔きひろめること」を主張している。この主張は、個人と国家の予定調和を前提にしている。個人に対して「善種」をまけば、仁・義などの徳が習得される。個人の開拓を進めれば、「国家」は「善種」にあふれることになる。

二宮金次郎は村の再建をしているが、この再建を「仕法」と呼んでいる。村だけではなく、武士に対しても「仕法」を実施している。小田原藩の家老の服部家、小田原藩の分家である桜町領などの財政立て直しをしている。しかし、小田原仕法の過程で、二宮金次郎は「安民」が「富国」につながると主張したが、財政の立て直しと武士階級の俸禄を確保しようとする藩の主張と対立したことがある[7)]。この対立から、二宮金次郎の個人に対する「善種」と藩や国家の「善種」とは、必ずしも一致しないことが理解できる。

2　道徳教材としての妥当性への反証

第1に、二宮金次郎は、開拓した荒地から本物の田を造成することと人間の「心の田」を作ることを同一視している。学校教育の場では、人間の「心の田」は、教師中心の教育の在り方を基礎にしている。「仁義礼智というものを培養し」たり「善種を収穫」したりする主体は、子どもではなく教師である。「善種」をまく人は教師に該当する。人間の「心の田」を作るためには、教師の指導が必要になる。では、どのような指導をするのか。たとえば、コメをたくさん収穫するためには草取りをしなければならない。草取りは悪いものを取り除くことであるが、教師は何をするのであろうか。子どもにとって「なまけ心」のような有害なことを取り除くことが考えられるが、教師が具体的に何をすべきかが説明できていない。「心の田」という言葉から連想できることは、コメ作りの手順だけである。また、子ども自身が「善種」をまいて自分で「心の田」を開発し成長することはできない。子どもは、自ら「心の田の荒蕪」を把握し、修正することができないのであり、子どもの自律性や主体性が否定されている。

次に、二宮金次郎にとって、「田」はコメを収穫するためのものである。コメは種もみをまく人と収穫する人を連想させるが、教師が教育することや子どもが学習することとは異なっている。「心の田」を開拓する場合、開拓する人は教師、開拓される人は子どもであると理解できる。しかし、誰が「心の田」を開拓するかは、コメの収穫や開拓者からは説明されていない。教師の役割は「仁義礼智」を教えることである。子どもが自学自習によって「仁義礼智」を学習することは難しいであろう。二宮金次郎は自分で学習するための書籍を購入していたが、誰かに教えてもらったことは、まだ明らかにされていない。

第2に、二宮金次郎は、「人々の心の田の荒蕪」を指摘することによって性悪説を主張している。「荒蕪」は荒れた土地を意味しており、望ましい価値を内に秘めているのではない。大貫章氏は、「二宮尊徳の人間観は、かなり性悪説に近い」[8)]と控えめな指摘をしている。性悪説によれば、人間は生まれつき悪なる存在である。そのままにしておくと、人間は必ず悪い方向に向かう。人間の持つ悪い芽は、早い時期に摘みとらなければならない。人間が生来持っている悪い傾向性は、発現しないように抑制しておく必要がある[9)]。

二宮金次郎によれば、「善い種」は「天から授かった」ものである。この考えには特定の宗教はかかわっていないが、子どもを受身的な存在と考えている。「天から授かった」という言葉は、子どもが自分自身で身に付けていくことを排除している。子どもは、母親の胎内の中にいるときから、自分で手足を動かしたり、指しゃぶりをしたりしている。誕生してからは、自分の身の周りにある事物に関心を持ち、触ったり、口に入れたりする。子どもは、自発的に行動する特性を持っている。幼児教育で注目されている遊びは、自発的な行動なのである。「天から授かった」という言葉は、このような子どもの自発的な行動を考えていない。

第3に、「植物モデル」の比喩的表現を考えてみよう。「心の田」を開拓することは、植物を育てることになぞらえて比喩的に表現したものである。種は何であろうか。ひとつには、コメが考えられる。田に稲の種をまき、コメを収穫する。この説明はわかりやすい。同様に、心の田に何らかの種をまき、収穫する。この種は、「仁義礼智」であると理解できる。「仁義礼智」を身につければ、立派な農民という収穫が得られる。この説明は分かりにくい。「心の田」という言葉を使用しなくても、「仁義礼智」を身に付ければ、立派な農民であると説明すればよい。

種は、学習者中心の考え方である。種の中には、植物

が発芽し、成長できる胚が含まれている。成長するのは学習者自身であり、種をまく人はその補助的な役割をするだけである。種は自分自身で田にまくことができない。人間の場合、学習する意欲があれば、自分自身で学習していける。

このように、二宮金次郎の道徳観は、農民階級に生まれた生い立ちに影響されている。さらに、環境については、コメを収穫することで生活していたので、田を造成し田でコメを作るように、「心の田」を開発することを主張するようになったと言える。二宮金次郎の主張した「植物モデル」は、人間の教育の在り方を植物の成長で説明したことはユニークであり、生活に根差した教育論として評価してもよいと思われるが、いくつかの点で説明不足であることは否めない。

3　二宮金次郎が描く理想的人間像と現代教育における方向性の欠如

二宮金次郎は、どのような理想的人間像を考えていたのか。教育を議論するときには、目標となる理想的人間像を説明すべきである。この理想的人間像は到達目標であり、教育した結果としての産物である。では、以下において、二宮金次郎が主張した理想的人間像を検討してみよう。

第1に、二宮金次郎が描く理想的人間像は、「仁義礼智」を身に付けた人材である。本物の田の造成の目標は、多くのコメを収穫することであり、「心の田」の目標は、「仁義礼智」という徳を身に付け、良い人格を形成することである。二宮金次郎は「天から授かった善（よ）い種、すなわち仁義礼智というものを培養」することを述べている。「善（よ）い種」は「仁義礼智」を意味しているので、「仁義礼智というものを培養」された人間が道徳教育の目標となることができる。二宮金次郎にとって、理想的人間像は、「仁義礼智」を身に付けた人材である。これは儒教的な徳を備えた人間像を目標とすると理解できるが、目標とする人間像や到達すべき人間像の詳細が書かれていないので、どのような方向に子どもを教育していけばよいのか不明である。

第2に、二宮金次郎の理想的人間像は、良い農民を育成することである。二宮金次郎の理想的人間像は、当時の身分制度の枠の中で考えられていた。二宮金次郎が生きていた時代では、農民は農民らしくあり続けることが求められていた。身分制度によって、武士、農民、町人の区別があった。商品作物などが流通したので、一部の町人の力が増していたが、せいぜい苗字帯刀を許される程度であり、身分制度は残ったままであった。二宮金次郎が描く理想的人間像は、良い農民になることと理解できる。もともと「仁義礼智」は農民のための徳ではなく、もともとは武士のための徳であった。「仁義礼智」を備えた農民は、農民のまま一生を終えることになる。二宮金次郎が描く理想的人間像の考え方は身分制度を維持するためのものであり、農民は農民のまま生きることを肯定している。

このように、二宮金次郎の理想的人間像は「仁義礼智」を身に付けた人材であるが、当時の身分制度を維持することになり、身分制度を壊して平等的な社会を作るまでには至らなかった。

Ⅲ　二宮金次郎が主張した徳と道徳教材としての位置づけ

1　二宮金次郎が主張した徳

二宮金次郎は「徳」という言葉を使用しており、徳を教えることを生活実践の指針としている。二宮金次郎の徳の考え方は、次のように整理できる。

第1に、二宮金次郎は、「あらゆるものに徳がある」と考えている。大貫章氏は、これを「万象具徳」と呼び、次のように説明している。

「尊徳は物や人に備わる良さ、取り柄、持ち味のことを『徳』と名づけ、それを活かして社会に役立てていくことを『報徳』と呼びました。荒地にも荒地なりの徳（良さ、取り柄）があります。荒地の徳を人間の徳が活かすことによって、実り豊かな田畑に変えていくことができます。ワラの徳を活かして、ナワやワラジ、タワラなどの新しい徳を作ることができます。これが“報徳”なのです。」[10)]

この説明では、「報徳」とは、「物や人に備わる良さ、取り柄、持ち味」を活かして、社会に役立てることとしている。二宮金次郎の徳の考え方は、独特である。「荒地」は耕作地としては役に立たないので、一般に悪いものである。しかし、二宮金次郎は、「荒地にも荒地なりの徳（良さ、取り柄）」を認めている。

もともと「徳」は、優れた特徴を持つことを表現する言葉である。広辞苑第六版は「徳」を「道をさとった立派な行為。善い行いをする性格。身についた品性。（中略）　人を感化する人格の力。めぐみ。神仏の加護。（以下略）」と説明している。「徳」は「立派な行為」であり、「善い行いをする性格」である。いずれも、「徳」がよいものとして価値づけられた言葉であることを示している。

「荒地」はコメを作ることには適さないので、優れた「徳」を持つとは言えない。「荒地」が優れた「徳」を持つなら、その「徳」を伸ばさなければならないし、「荒地」の「徳」を別のものに変えてはいけないことにな

る。

二宮金次郎は「徳」を拡大解釈している。「徳」は、人間によって価値づけられたものである。人間とかかわりがない時、自然の事象は価値づけとは無縁である。「荒地」は耕作地ではないという特徴を持っているに過ぎず、「耕作地ではない」という価値を持っているのではない。

第2に、二宮金次郎は「仁義礼智というものを培養」することを主張している。この「仁義礼智」は、徳の例である。「仁義礼智」の4つの徳は、孟子の説に由来している。信を加えると儒教の五常になり、儒教で守るべき道徳である。広辞苑第六版によれば、仁は「人としての思いやり。いつくしみ。なさけ」である。義は「道理。条理。物事の理にかなったこと。人間の行うべきすじみち」である。礼は「社会生活の規範。儀式・作法・制度・文物など」である。智は「頭のはたらき。理解し判断する力」である。信は「欺かないこと。言をたがえないこと。まこと。」である。一方、五倫は儒教における5つの道徳法則である。五倫は父子、君臣、夫婦、長幼、朋友である。

五常も五輪も、徳と呼ぶことができる。二宮金次郎の道徳の考え方は、仁・義などの徳を修得することが、個人や為政者のあるべき姿であるとしている。

第3に、二宮金次郎は、勤・倹・譲という徳を人々に習得させることを主張している。これらの3つの徳は、「勤労」、「分度」、「推譲」に対応していると考えられる。人々の「心の田」を開発することは、「怠、奢、奪から勤、倹、譲への心田開発」[11]をすることである。怠は、なまけ・おこたり、奢は、おごり・ぜいたく、奪は、うばう・あらそうことを意味している。

勤・倹・譲は「かなえの三本足」とたとえられており、3種類のすべてを実行することが必要だとされている。勤労は自分自身が使用する物品を得るために勤労することを意味し、その物品を無駄にしないことを意味している。自分自身の衣食住を確保すると同時に、自分自身で得た物品の一部を子孫、親せき友人、郷里、国家のために譲ることを奨励している。二宮金次郎の教えは、次のように説明されている。

「翁のことばに、わが道は勤倹譲の三つにある。勤とは、衣食住になるべき物品を勤めて産出することをいう。倹とは、産出した物品をむやみに費やさないことをいう。譲とは、衣食住の三つを他に及ぼすことをいう。この譲には、いろいろある。今年の物を来年のためにたくわえるのも譲だ。それから子孫に譲るのと、親せき友人に譲るのと、郷里に譲るのと、国家に譲るのとがある。その身その身の分限によって、つとめて行うべきだ。たとい一季半季の雇い人でも、今年の物を来年に譲るのと、子孫に譲るのとの譲りは、必ずつとめるがよい。この勤倹譲の三つは、かなえの三本足のようなもので、一つでも欠けてはならない。必ず兼ね行わねばならぬ。」[12]

勤・倹・譲の中でも、譲が特徴的である。譲は利他主義そのものであり、自分のためではなく、他者のために自分の蓄えを提供することを意味している。「子孫」から「国家」への考え方は「一円融合」と呼ばれ、二宮金次郎の思想の中核をなしている。

譲については、「子孫」、「親せき友人」、「郷里」、「国家」という順に並べられている。この順番に注目したい。「子孫」の前には、自分が位置づけられると推測できる。自分が生活できなければ、「子孫」に残す蓄えが作れないからである。自分から始まり、最終的には「国家」にまで蓄えを譲ることを主張している。自分や「子孫」のために働いて「衣食住になるべき物品」を産むことは、道徳の観点から判断すると、人々に受け入れやすい考えである。一方、自分のために働くことと「国家」のために蓄えを譲ることを比較すると、後者の方が難しいと判断できる。自分と「国家」を比較すると、どちらが優先されるのであろうか。

自分のために蓄えることは、利己主義である。他方、「郷里」や「国家」のために蓄えることは、利他主義である。二宮金次郎は、どのようにして利他主義を身に付けたのだろうか。ひとつには、二宮金次郎の両親が病気になったり亡くなったりしたときに、村人から助けられたことに感謝したのではないか。村人のためにわらじを作ったことは、一人前の仕事ができない二宮金次郎に対して厳しい言葉を投げかけなかったからだと推測できる。もうひとつには、当時は川の氾濫がしばしば起きていた。それを防ぐための堤防は、村人全員で補強しなければならなかった。「郷里」に対して蓄えを譲ることは、村人全員を救うことになり、その結果、構成員である家族や自分が幸せになることに結び付く。

「一円融合」も徳のひとつであると理解できる。「一円融合」とは、次のことを指している。

「一円融合とは、すべてのものは互いに働き合っており、一体となったときに初めて結果が出るという意味です。植物は、水、温度、土、養分などが融け合った中で育ちます。人間が育つのもこれと同じで、自然環境や社会環境が一つになって融け合い、働き合う中で育っています。」[13]

この「一円融合」は、自分と他者の共存を主張している。特に、他者のために物品を譲るという考え方は利他主義であり、二宮金次郎の思想をよく表している。

「一円融合」は、「植物モデル」で説明されている。植物が「水、温度、土、養分などが溶け合った中で育」つように、人間も「自然環境や社会環境が一つになって溶け合い、働きあう中で育ってい」くと説明されている。植物については、「水」などの外部環境が列挙されているが、「人間」そのものの内部環境には触れられていない。植物と異なり、人間は積極的に外部環境に対して探究していくという行動をとる。知的好奇心を持つのが人間である。乳幼児は探索行動をしているので、父親のたばこなどの有害物質を口に入れるのである。植物は自分自身で行動できない。せいぜい種を風で飛ばしたり、水に流したり、動物の体にくっついたりするだけである。

2　道徳教材としての位置づけ

二宮金次郎の道徳教育は、「仁義礼智」という徳を修得するという点で、人格教育（キャラクター・エデュケーション：Character Education）のひとつとして位置づけることができる。この道徳教育の考え方は、西洋ではアリストテレスまでさかのぼることができ、倫理学では、徳の理論（virtue theory）と呼ばれている。アリストテレスは、『ニコマコス倫理学』において、徳の理論を展開している。人格教育は、現在、アメリカで普及している道徳教育のひとつである。

二宮金次郎の考え方は、現代アメリカの人格教育と類似している。現代アメリカの人格教育は、L・コールバーグ（L. Kohlberg）のモラル・ジレンマ、価値の明確化の方法を克服する道徳教育である。人格教育は、いくつかの徳を設定し、その徳を学校や家庭で教えることを基本としている。

T. リコーナ（T. Rickona）によれば、人格教育は、「徳（ヴァーチュ、善の実践）を意図的に教えること」[14]である。T・リコーナは、尊重と責任を主張している。T・リコーナは、徳を次のように説明している。

「徳とは、賢明、正直、親切、勤勉、そして自己修養などのように、客観的に存在し、人間にとって善とされる特質です。徳は、個人にとって、満足のいく生活、調和した人生を送るうえで欠かせません。徳があれば、すべての人間社会でお互いに調和し、生産的に暮らせるようになります。

徳は、本質的に善であり、時代によって変化しないものです。思慮深さ、忍耐、ねばり強さ、勇気はいつでも徳であり、将来もそうでしょう。徳は時代や文化を超越しています。」[15]

この人格教育の特徴として、次のことを指摘できる。

第 1 に、道徳は徳の束から構成される。道徳教育は、徳の束を教えることである。尊重や責任などの徳を子どもに教え、子どもがそれらの徳を修得すれば、道徳教育の目標が達成されたことになる。二宮金次郎が考えていた道徳観では、「仁義礼智」という徳の束を修得することが必要になる。

第 2 に、徳の数と中身は、主張する人によって、異なっている。たとえば、T・リコーナは、学校が教えるべき 2 つの基本的な価値概念として、尊重と責任を挙げている。ベンジャミン・フランクリン（Benjamin Franklin）の 13 の徳は、節制、沈黙、規律、決断、節約、勤勉、誠実、正義、中庸、清潔、平静、純潔、謙譲である[16]。

日本の小学校学習指導要領と中学校学習指導要領の道徳教育の内容についても、内容項目の数は同じではない。学習指導要領が改訂されるごとに、一部の内容項目が新設されたり、統合・分離されたりしている。小学校については、1977（昭和 52 年）の 28 項目から 2014（平成 26）年の 61 項目までばらつきがある。中学校では、1977（昭和 52）年の 16 項目から 2007（平成 19）年の 24 項目までの幅がある[17]。道徳教育の内容として、いくつの内容項目を選択すべきかについては、明確な基準が存在しないと言ってもよいと思われる。

二宮金次郎は「四書五経」から儒教的な徳を学び、独特の道徳の考え方を作り上げた。『大学』は四書五経のひとつであり、儒教の基本的な経典である。四書とは『大学』、『中庸』、『論語』、『孟子』であり、五経とは『書経』、『易経』、『礼記』、『詩経』、『春秋』である。『大学』では、学問をする目的を、次のように説明している。

「大学（だいがく）の道は、明徳（めいとく）を明らかにすることに在（あ）り。民を新たにするに在り。至善（しぜん）に止（とど）まるに在り。」[18]

守屋洋氏の説明によれば、大学の道は学問を指しており、知識の習得も大事であるが、それ以上に大切なのが人格の陶冶である。この説明の中にも、人格の陶冶という道徳的なねらいが含まれている。また、「民を新たにする」ことは、自分だけを高めるのではなく、他の人にも役立つことを目指すことと理解できる。ここにも、利己主義ではなく、利他主義が主張されており、これらの書物が二宮金次郎の人格形成に大きな影響を与えている。

「勤勉」はひとつの徳であるが、二宮金次郎に関する複数の徳の一部であることを忘れてはならない。

Ⅳ　二宮金次郎を教材とした道徳教育の目標と内容

道徳教材としての二宮金次郎は、道徳教育の目標や内

容に合致している。特別の教科　道徳の目標は、「物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる」ことである。二宮金次郎を学ぶことは、「自己の生き方についての考えを深める学習」に役立つ。

内容項目については、4つの視点が示されている。

A 主として自分自身に関すること

B 主として人との関わりに関すること

C 主として集団や社会との関わりに関すること

D 主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること

「勤労」はCと、「分度」はAの節度、節制と、「推譲」はCの社会参画、公共の精神と関連している。

配慮すべき観点は、①ねらいを達成するもの、②生きる喜びや勇気を与えられるもの、③特定の見方や考え方に偏った取扱いがなされていないもの、である。道徳教材としての二宮金次郎は、①と②を満たしているが、③については、注意が必要である。二宮金次郎の生家が貧しかったことは正確ではないので、偏った取り扱いがされていると言える。

では、二宮金次郎の道徳教材が道徳教育の目標や内容をどのように具体化しているかを詳しく見てみよう。

二宮金次郎は、「勤労」を教えるための道徳教材として取り上げられてきた。「先人の伝記」のひとつとして、二宮金次郎の行った実績から判断して、子どもの時の「勤勉」が注目されたのである。二宮金次郎の道徳教材は、定番の教材のひとつとして使用されている。

二宮金次郎の伝記を道徳教材にした授業の目標と内容の例を考えてみる。道徳教育の目標は、「こつこつと努力する大切さを考える」ことであり、内容項目の「勤労」を学ぶことである。二宮金次郎の伝記の一部を読み物資料として作成し、児童に何ができるか、何を努力するかを考えさせる。

このように、二宮金次郎の伝記は、「勤労」を教えるための道徳教材として使用されてきた。二宮金次郎が一生懸命勉強したり働いていたりすることを理解するとともに、自分は何をすべきかを児童に考えさせる道徳教材である。二宮金次郎をはじめとする先人の伝記は道徳教材のひとつとして有益であり、「勤勉」を教えるのに役立ってきた。二宮金次郎の子どもの時の考えや行動を道徳教材にすれば、道徳科の内容項目の「勤勉」は教えることが可能であり、道徳の授業で実践されてきた。

しかし、二宮金次郎の思想が「勤労」だけに矮小化され、思想の全体像が理解されていない。二宮金次郎の伝記は「勤勉」を教える教材として使用されてきたが、二宮金次郎の道徳観や価値観の全体を理解するという視点が見過ごされてきたのである。「勤労」は二宮金次郎が主張した報徳思想の一部であるが、「勤労」だけでは二宮金次郎の思想を説明することができない。「勤労」する理由は、自分や家族、親せきのために蓄えをし、さらには他者のためにそれを使用するためである。

二宮金次郎の思想の中で、最も注目すべきことは、他者のためという利他主義に基づいて「勤労」することである。計画的に支出するという「分度」を実行することで、他者のためという「推譲」を達成することが最終の目標であると言える。先人の伝記として活用するためには、二宮金次郎の思想を一面的に取り扱うのではなく、全体を見通す理解が必要となる。「勤労」を教えることは大切であるが、その目標は自分のためだけで完結する利己主義ではなく、利他主義を極めて重視している。

終わりに

本論文では、二宮金次郎の伝記を用いた道徳教育の考え方を検討した。二宮金次郎は日本における「先人の伝記」の代表であり、日本人の精神的な支柱とも言える。二宮金次郎は、「心の田」を開発することを道徳観の中心に置いている。この考え方は農民の生活と結びついた「植物モデル」である。この考え方は、道徳教材としての二宮金次郎の価値を否定するものではないが、子どもの主体的な成長力を説明できていない点に問題が残る。

非常時に日本人が暴動を起こさないのは、江戸時代から道徳的な内容を学習しているからかもしれない。日本人のマナーの良さは、明治時代より前から長年にわたって培われてきたと考えられる。日本人が勤勉であることも、明治時代から二宮金次郎を通して人としての行動規範を学んできたことに一因を見いだせるかもしれない。

二宮金次郎像は勤勉の象徴であり、児童・生徒が一目見て理解できるものである。二宮金次郎は江戸時代に生きた人であるが、現代に生きる児童・生徒にも学べることがある。結果を得るためには、長期にわたる努力が必要である。子どもの時から小さな努力を積み重ねることが、将来の結果につながることを忘れてはならない。二宮金次郎の思想から勤勉を学び、児童・生徒が自分のこととして受け止め、自分には何ができるか、どういう生き方をするのかを考えることが大切である。現代において、二宮金次郎の伝記を学ぶことは、将来を生きるための指針を身に付けることにつながっていく。

二宮金次郎の伝記は、道徳教材として活用され、勤労を教えることに有益であった。しかし、二宮金次郎の思想全体を見れば、勤労はその一部でしかなく、勤労が目指すべき目標が語られていない。勤労の目標は、将来の

自分だけではなく、他者のために蓄えを譲ることである。二宮金次郎の思想の中で、最も注目すべき点は、他者に譲るという利他主義である。この利他主義による生活扶助の考え方が、共生できる社会を作っていく基本となる。勤労だけではなく、「推譲」に注目することが、二宮金次郎の思想全体を正確に理解することにつながる。

＊本論文は、2017 年度 JSPS 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）、基盤研究（C）、課題番号 17K04895「アクティブ・ラーニングを用いた道徳教材の開発と評価方法に関する研究」、課題番号 16K03243「現行学校教育における『伝統文化』の分析及び活用の可能性についての総合的研究」（2016 年度、研究代表者は高木史人教授）の助成を受けた研究成果の一部である。

引用文献

1）伊藤利明、石村由利子、「道徳教材としての『先人の伝記』の適切性と有用性」『名古屋経済大学人文科学論集』第 97 号、2018 年 3 月 10 日、53-63 頁。
2）報徳博物館「二宮尊徳と報徳思想」公益財団法人　報徳福運社 http : //www.hotoku.or.jp/sontoku/hotoku/（参照 2018-5-21）
3）二宮康裕、『二宮金次郎正伝』モラロジー研究所、廣池学園事業部、2010 年、30 頁。
4）同上。
5）木暮正夫、『おもしろくてやくにたつ子どもの伝記 18 二宮金次郎』、ポプラ社、1999 年、160 頁。
6）二宮尊徳、児玉幸多訳、『二宮翁夜話』中央公論新社、2012、2015 年、62 頁。
7）二宮康裕、『二宮金次郎正伝』、前掲書、146-184 頁。
8）大貫章、『二宮尊徳の生涯と業績』幻冬舎ルネッサンス、2009 年、175 頁。
9）性悪説については、下記参照。
伊藤利明、『生涯学習の理論』中部日本教育文化会、2015 年、119 頁。
10）大貫章、『二宮金次郎の生涯と業績』、前掲書、78 頁。
11）同上、173 頁。
12）福住正兄（原著）、佐々井典比古（訳注）、『訳注　二宮翁夜話（上）』一円融合会、1958 年、2013 年、125 頁。
13）福島県相馬市役所「相馬の歴史講座『御仕法』第 2 回　二宮尊徳の教え」広報そうまウェブ　https : //www.city.soma.fukushima.jp/rekisi/kouza/2008/200802.html（参照 2018-5-21）
14）T・リコーナ著、水野修次郎監訳・編集、『人格の教育――新しい徳の教え方学び方』北樹出版、2001 年、12 頁。
15）同上、p.17.
16）名言 DB　リーダーたちの名言集「ベンジャミン・フランクリンの名言」since 2004　名言 DB　https : //systemincome.com/5821（参照　2018-5-21）
17）江島顕一、『日本道徳教育の歴史』ミネルヴァ書房、2016 年、351-352 頁。
18）守屋洋、『【新約】大学・中庸』PHP 研究所、2016 年、20 頁。